

趣味の回答が自己形成にもたらす影響

—現代人にとって読書を趣味と述べる意味—

内田妃南（後藤ゼミ）

HS19-1025F

論文の目次

はじめに

1 現代人にとっての趣味

1.1 文化資本

1.2 大衆文化社会の日本における文化資本

2 先行研究：読書に見られる文化趣味と趣味自認の差異

3 読書を趣味と述べる資格

3.1 アンケート調査：大学生の読書活動

3.2 現代における読書の希少性

3.3 アンケート調査：読書の希少性と趣味の回答の関係性

4 「当たり障りのない趣味」を述べる人々

4.1 「当たり障りのない趣味」とは

4.2 人々が「当たり障りのない趣味」を述べる理由

5 趣味の回答の裏側にある思慮

5.1 趣味を述べる資格の有無

5.2 趣味の回答に付きまとう他者からの評価

5.3 まとめ：現代日本の若者における文化資本

6 考察

6.1 「資格」によるマウンティング

6.2 趣味による優劣

6.3 結論：趣味の回答と自己形成

おわりに

[注]

[参考文献・ウェブサイト]

付録：アンケート調査

論文の要旨

はじめに

読書離れが深刻化する現代だが、その流れと矛盾するかのよう、読書を趣味と述べる人は多く存在する。このことから、自分の趣味を他者に述べる行為には、実際にどのような活動を行っているかや、何を好んでいるのかを示す以上の、何らかの意味が含まれていると考えられる。

そこで本研究では、現代人が読書を趣味と述べる理由を分析し、人々が趣味を回答する際に何を意識しているのかを明らかにした。

1 現代人にとっての趣味

文化資本とは、P.ブルデューが提唱した概念であり、所有する本人に何らかのポジティブな影響を与える能力や文化的行動を指す。また、文化資本は、集団や場ごとに定められている。

ブルデューによれば、支配階級は文化資本を利用して、正統趣味を排他的に占有し、大衆から卓越化を図る。しかし、日本においては、正統趣味はむしろ「隠すべきもの」として扱われる、という指摘がある（片岡 2003）。

では、現代日本においては、どのような趣味が文化資本として価値があるのか。そして、文化資本としての価値の序列は、人々の趣味の回答にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

2 先行研究：読書にみられる文化消費と趣味自認の差異

岡澤・團は、ある文化活動を楽しむことと、それを趣味とみなす趣味自認との差異に注目して研究を行った。すると、ある活動を趣味と述

べるとき、ただその活動をした経験や習慣がある以上のなんらかの資格が求められることがありうると判明した（岡澤・團 2017）。

3 読書を趣味と述べる資格

本研究では、102 名の大学生を対象にアンケート調査を実施した。このデータから、読書を趣味と述べるかどうかの判断には、個人の読書量が関係していることが明らかになった。

この結果を掘り下げるために、「読書の希少性が高まっているため、読書を趣味と述べやすい」という仮説を立て、読書の希少性と趣味の回答を比較したが、因果関係は見られなかった。

4 「当たり障りのない趣味」を述べる人々

上述のアンケート調査から、回答者の約半数が趣味の回答に困った経験があり、一部の人は趣味の回答に困った際に「当たり障りのない趣味」を述べる傾向にあることを発見した。

この「当たり障りのない趣味」が含意することに着目し、検討を行った。そして、「当たり障りのない趣味」とは、手軽に行える趣味や活動の認識が幅広い趣味を指すという考察に至り、読書もそれに該当すると考えられた。

また、人々が趣味の回答に困る理由に注目し検討したところ、多くの人は、「それは趣味と述べるのに相応しい活動内容か」、もしくは「それを趣味と述べることで自身にマイナスな影響が及ばないか」を考慮して、他者に述べる趣味を取捨選択していることが分かった。

5 趣味の回答の裏側にある思慮

前章までの分析から、現代日本の若者にとっての「文化資本として価値のある趣味」は大衆的な「当たり障りのない趣味」であることが明らかになった。つまり、現代人は多くの人からプラスの印象を持たれやすい趣味を他者に述べる傾向にあると言える。

この点において、読書は「当たり障りのない

趣味」という大衆文化としての顔を持ち、同時に、読解力や集中力、教養を必要とするため、正統文化としての顔も併せ持っている。そして、この読書の「万能さ」が、趣味を尋ねられた際に「読書」と回答する現代人が多い要因の一つである。

6 考察

現代人は趣味を回答する際に「資格」の有無と、他者からの評価を意識しており、その背景には、他者よりも優位に立ちたいという欲求が存在している。そのため、現代人は「当たり障りのない趣味」を述べることで、他者からの「資格」によるマウンディングや趣味によって優劣をつけられるのを避け、理想の自己形成を促しているという考察を行った。

また、読書はそんな現代人にとって万能な趣味であるため、読書を趣味と述べる人が多いと結論づけた。

おわりに

現代人は、他者にどう思われるかを重視し、他者に述べる趣味を取捨選択していた。

しかし、「当たり障りが無い」ことや、「万能さ」ゆえに、読書が趣味として現代人に好まれていることは、読書本来の価値が忘れ去られているように感じる。

多様な人と交わる現代人にとって大切なことは、他者がどう考えるかではなく、自分自身が好きなことを見失わないことではないだろうか。

主要参考文献

- 片岡栄美, 2019, 『趣味の社会学 文化・階層・ジェンダー』青弓社。
片岡栄美, 2003, 「「大衆文化社会」の文化的再生産」宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力 反射するブルデュー』藤原書店, 101-135。
岡澤康浩・團康晃, 2017, 「読者たちのディスタクシオン」北田暁大・解体研編『社会にとって趣味とは何か』河出ブックス, 131-158。